

## 藤堂高猷書『美與之野帖』傍註

鈴木亮

## 【解題】

所謂名家の認めた和歌短冊を蒐め始めて十年以上が経つた。先年、偶々伊勢津藩第十一代藩主藤堂高猷たかゆきの短冊を廉価にて購ふことが出来た（本稿末尾の図版参照）。私は、目下のところ徳川時代後期に活躍した歌人井上文雄染筆の短冊を専ら蒐めてゐるのだが、其の周辺の人物の手になる短冊にも亦心惹かれるものがある。短冊を手に取りうち眺めてゐると、それを記した人物がまさに眼前に現れて来るやうな気がする、これが短冊の持つ底知れぬ魅力なのではあるまいか。短冊一葉に、歌は一首しか記されてゐない（詩、誹諧短冊も同様）。それゆゑ研究対象として見做されることは左程多くはないのだが、其処からなつかしき人びとが時代を越えて現代に蘇へるのである。「見ぬ世の友」とはよく言つたものだ。

○  
 此たび、此処に紹介する『美與之野帖』は其の高猷の筆になる和

歌の書道手本である。伝本も尠く<sup>①</sup>、巻頭巻末に高猷の書と明記せられてゐないことから、跋文を記した井上文雄の歌集と目されることが屢々あつた。<sup>②</sup>しかし、藤原（加藤）千浪のものとした跋文に「伊賀中将の君の御筆の跡なり」と述べられてゐることから、この『美與之野帖』は、井上文雄の著作ではなく、「伊賀中将の君」すなはち伊賀・伊勢二国を領有した藤堂氏の左中将であつた高猷が筆をとつた法帖であるといふことが知られる。法帖といふと、私など仮名書に優れ、後年「千蔭流」として一派を成した江戸派の祖、加藤（橘）千蔭の作品が先づ脳裡に浮かぶ<sup>③</sup>のだが、幕末期には書家巻菱湖のそれを筆頭に実に多様な法帖類が刊行せられてゐるのである。<sup>④</sup>なほ、高猷の書体は、師文雄の筆蹟が「千蔭流に近い」と称されてゐる<sup>⑤</sup>ことにも拠るのだが、千蔭の流れを汲んでゐると指摘することが出来るであらう。

○  
 高猷は、文化十年（一八一三）二月九日、津藩第十代藩主藤堂高兌の男として江戸藩邸に生れる。母は愛川氏。幼名寿千代、字を道

卿といひ、観月樓・詢堯斎・喜縁と号した。文政七年（一八二五）父高兌が四十四歳にて逝いたことを以て、翌年二月其の遺領を嗣ぎ、十一代藩主となる。侍講には昌平齋で古賀精里に師事した儒者齋藤拙堂ををり、彼等の助力を得て二百九十四卷百四十八冊より成る大著『資治通鑑』を藩校有造館より、十余年もの長きをかけて翻刻刊行したことも特筆に値する。鳥羽伏見の戦では初め幕府軍に加はつてゐたが、後、にはかに新政府軍に転じ幕府軍を攻撃したため、幕府軍敗北の一因を作つたとも言はれてゐる。

明治四年六月には、長男高潔に家督を譲り隠居し、廢藩置県後は伯爵に列せられた。明治二十八年二月九日薨去、享年八十三。墓は染井靈園に存し、正面に「正二位勲二等藤堂高猷墓」と刻されてゐる。

和歌は江戸の井上文雄、伊勢の佐々木弘綱に学んだ（この二人は師弟の關係にある）。「こたび伊賀中将の君（藤堂高猷）、翁（文雄）の家の集あらば奉れ。桜木ににははせて世にあまねくしてむと、おのれに仰言有りける」と佐々木弘綱が師である文雄の家集『調鶴集』序文に書いてゐるが如く、『調鶴集』は高猷の経済的援助があり出版されたものなのである。高猷が如何なる経緯で文雄に歌文を学ぶに至つたのかは詳らかでない。だが文雄は御三卿の一、田安家に仕へてゐたことから、多くの貴顕より交誼を賜り、高猷の他にも筑前福岡藩主黒田長知（高猷三男）、筑後柳河藩主立花鑑寛、阿波徳島藩主蜂須賀齊裕、信濃飯山藩主本多助成、美作津山藩主松平齐民といった大名に和歌を教授してゐるのである。かうした文雄をと

りまく大名文藝圈の一翼を高猷が担つてゐたといふことになるであらうか。

阿波の宰相の御まへ、御国におはしましけるころ、海辺立春といへる御題を給はせて歌めしければ

淡路がたあはとくすみてもろ人のゑみの眉山はるは来にけり  
（春・四）

阿波の殿の御もとに伊賀の少将の殿まゐらせたまひて、御当座有りけるに、梅花風静といふことを

吹くとしもおもひわかれぬはる風に梅がかあまるゆふぐれの庭  
（春・四〇）

「阿波の宰相」「阿波の殿」は蜂須賀齊裕、「伊賀の少将の殿」は藤堂高猷のこと。「調鶴集」を繙けば、かうした諸大名と文雄との交流の一端がそこかしこに窺へる。

## ○

『美與之野帖』の「美與之野」とは、吉野（現奈良県吉野郡）をいふ美称御吉野のことである。古来歌枕として名高い吉野の地は、「よきひとのよしとよくみて、好常言師。芳野吉見與。良人四來三。」（萬葉・1・二七・天武天皇）等と詠はれ、数多の人びとの信仰を集めてきた。この書名の示すとほり、『美與之野帖』は、吉野の春の景物を詠じた二十五首の古歌を高猷が書き、季節の推移に従つて排列したものとなつてゐる。定家十三首、良経九首、家隆三首と、新古今時代を代表する御子左家の歌を採り、「新古今を真盛といはんも、

たがふべからず。……おほかた此集をわろくいひ朽すは、みだりなる強<sup>シ</sup>ごと也」(『うひ山ぶみ』)と述べ、新古今集を模範とした宣長の言説を踏襲した撰歌態度である。高猷が定家の歌を良しとしたことの傍証となる好資料と言へるのだが、翻刻といふことで、其の筆勢を伝えることが叶はないのがいさ、か口惜しい。収録歌に就て、『新編国歌大観』に掲載せられる歌と若干の異同があり、高猷が披見した本の行方が気にかゝるところである。

跋文は、井上文雄、加藤千浪がものしてゐる。文雄、千浪ともに高猷の書を絶讃してをり、千浪に至つては「貫之朝臣あるは公任卿などをば臨写せる物にや」と、紀貫之、藤原公任の書を臨写したものと見紛ふばかりの作である、と讚歎の声をもらす。千浪は江戸日本橋数寄屋町に住し、文雄と親しく交際してゐた国学者歌人である。其の門からは、樋口一葉の師中島歌子が出てをり、歌子から歌文、書(千蔭流)の手ほどきを受けた一葉は江戸派の系譜に連なるといふことになる。<sup>(8)</sup>

なほ、高猷には『藤堂詢堯公和歌』といふ歌集が伝存し、<sup>(9)</sup>漢詩文集『詢堯斎文鈔』(明治十三年、塩田重弦)も刊行せられてゐる。福井久蔵は、高猷の漢詩文の才を「すべて侯の文は氣を以て成り、而も文藻見るべきものあり。容易に追隨しがたきところ」と高く評価してゐる。<sup>(10)</sup>

註1 「日本古典籍総合目録データベース」(<http://nasei.nii.ac.jp/~koten/about.html>)に拠ると、射和文庫、豊橋市美術館(森田家文庫)、村

野文庫に所蔵が確認出来る。但し、村野文庫は現存未詳。中野三敏氏は、『國書總目録』に洩れた数からいえば、この法帖類が最多なのではあるまいか。要するにその大半のものが『國書』未載ということになるはずである。』(『和本の海へ』平成二十一年、角川学芸出版)と、徳川時代に於る法帖類の全容は解明せられてゐないと説く。

2 足立巻一「やちまた」に登場する古書肆中田政吉書房の目録「伊勢たより 井上文雄大木小虫あり 一冊 一七、〇〇」といふ記載がある。また、『國書総目録』に於ても、井上文雄の著作とせられてゐる。

3 鈴木淳「芳宜園法帖記『樋口一葉の研究』(平成十八年、ベリかん社)

4 中野三敏「和刻法帖」目録篇・図版篇(平成二十三年、青雲堂書店)

5 鈴木淳「井上文雄」(大曾根章介ほか編『日本古典文学大事典』平成十年、明治書院)

6 天保七年(一八三六)〜嘉永二年(一八四九)刊。

7 訓みは、加藤千蔭『萬葉集略解』に従つた。

8 鈴木淳「樋口一葉日記を読む」(平成十五年、岩波書店)

9 成立年未詳。大正十三年新写本(福井久蔵旧蔵本)が国文学研究資料館に所蔵せられる(函架番号82・32)。

10 福井久蔵「諸大名の学術と文藝の研究」(昭和十二年、厚生閣)

### 【凡例】

- 一、底本は、架蔵の板本(慶応二年跋刊)を用ゐた。
- 一、仮名遣ひは底本の通りとした。
- 一、漢字、仮名の使ひ分けは底本のまゝである。
- 一、跋文に於て、底本には句読点是用ゐられてゐないが、新たに句読点を私に附した。
- 一、底本には清濁の別はないが、清濁の別を施した。

一、漢字は通行の字体に統一した。

一、反復記号はそのまゝ、残した。

一、私に歌番号を算用数字で頭書した。

一、一首の末尾に「出典・作者」を記した。

一、『新編国歌大観』所収歌と異同がある場合は、傍書してこれを示した。

一、改訂箇所に就ては、一行空けてこれを示した。但し、跋文に就ては、「(8表)の如く示した。

【書誌】

○極大本(縦三十一・二糎、横二十一・七糎)

○一卷一冊大和綴

○白色表紙(勾玉等の模様あり)

○料紙 奉書紙

○外題 中央

白地 匡郭

題簽「美與之野帖」

○見返 白地

○内題 なし

○蔵書印 なし

○丁数 九丁(本文七丁、跋文二丁)

○本文 一面六行(短歌一首三行)、整版

○跋文 一面十〜十一行

○奥附 なし

○刊年 不明

○袋題「美与志野帖」

○架蔵

【翻刻】

1 美よしのはやまもかすみてしらくきのふりにしさとに春はきにけり  
〔新古今・一・良経〕

2 子日するまつにちとせやちぎるらんおなじふたばの野べの若草  
〔壬二集・一〇〇三・家隆〕

3 しらざりきやまよりたかきよはひまではるのかすみのたつを見むとは  
〔統古今・一四九〇・定家〕

4 霞たちこのめはるさめきのふまでふるの、わかなけさはつみむ  
〔新後撰・二九・定家〕

5 そらは猶かすみもやらずかせさえてゆきげにくもるはるの夜のつき  
〔新古今・二三・良経〕

6 うぐひすの声のほひとなるものはおのがねぐらのうめのはるかぜ  
〔秋篠月清集・一〇七・良経〕

7 なびけどもさそひもはてぬはるかぜにみだれぞまさる青柳のいと  
〔拾遺愚草員外・六七七・定家〕

- 8 大空はうめのにほひにかすみつ、曇もはてぬはるのよの月  
〔新古今・四〇・定家〕
- 9 野もやまもおなじみどりにそめてけりかすみよりふるこのめはるかぜ  
〔続千載・六三・定家〕
- 10 かへるかり今はのこ、ろあり明に月と花との名こそをしけれ  
〔新古今・六二・良経〕
- 11 昔誰か、るさくらのたねをうゑて芳野を春のやまとなしけむ  
〔新勅撰・五八・良経〕
- 12 たづねきて見すはたかねのさくら花けふも雲とや猶おもはまし  
〔新後撰・九六・定家〕
- 13 けふ見れば雲も桜にうづもれてかすみかねたる美よしの、やま  
〔新勅撰・七二・家隆〕
- 14 山のはの月まつそらのにほふより花にぞむくる春のともし火  
〔玉葉・二一一・定家〕
- 15 朝なぎに行かふふねのけしきまで春をうかぶる波の上かな  
〔玉葉・一一九・定家〕
- 16 すみれつむ花ぞめ<sup>すり</sup>ころも露をおもみかへりてうつつきくさの  
いろ  
〔拾遺愚草・五一六・定家〕
- 17 つまこ<sup>ひ</sup>ふるき<sup>の</sup>すなくの、下わらびしたにもえてもはる<sup>かり</sup>を  
かな  
〔千五百番歌合・一五三・良経〕
- 18 あしふきのこやてふかたにやどからん人よぶこ鳥声もひまなし  
〔拾遺愚草員外・六八四・定家〕
- 19 からころもすその、き<sup>ぎ</sup>すうらむなりつまもこもらぬをぎの焼  
はら  
〔新統古今・一八六・良経〕
- 20 末遠きわかばの芝生うちなびきひばりなくの、ゆ<sup>ゆ</sup>ふ<sup>の</sup>ぐ<sup>れ</sup>の空<sup>す</sup>  
〔玉葉・一一一・定家〕
- 21 あめそ、ぐいけのうきくさ風こえて波と露とに蛙なくなり  
〔秋篠月清集・三一三・良経〕
- 22 春くればうきたのりにひくしめやなはしろみづのたよりなる  
らむ  
〔続拾遺・一三三・家隆〕
- 23 にほふよりはるはくれゆくやまぶきの花こそ花の中につらけれ  
〔続古今・一六七・定家〕
- 24 ゆくはるをうらむらさきの藤の花かへるたよりにそめやすくら<sup>は</sup>  
む  
〔拾遺愚草・五一八・定家〕
- 25 くやしくぞ月<sup>花</sup>と花<sup>と</sup>になれにけるやよひの空のあり明のころ  
〔続後撰・一六二・良経〕

かんなは草の手のいたくなだらかなれる物に侍れど、つひには我  
 国の文字のやうになり侍りにたり。されば、唐もじに名高き手はか  
 せたちもたま／＼女文字かけるは、春の蛸、秋の蛇、いと見ぐるし  
 くきたなげになん。殿のかくかりそめにうつさせ給ひし此御さうし  
 を見奉るに、御筆の力、鬼神をも嗜かしむべく、古の二卿はさら也  
 唐国の二王も天がけり見奉」(8表)らんには、やがて筆をなげうち  
 侍りなむかし。

六十七翁 井上文雄

慶応二年 七月既望」(8裏)

柯堂翁、此歌卷みせ給ひて、そこは古き筆の跡をこのみて、よく鑑  
 定するときば、こは誰人のかける物ぞ見さだめよと有に、貫之朝臣  
 あるは公任卿などをば臨写せる物にやといふに、翁打わらひて時代  
 たがへり、歌も新古今集なる物をといはるゝに、さてはえ思ひより  
 侍らず。誰にきととへば伊賀中将の君の御筆の跡なりとあるに、う  
 ちおどろかれて、今の世にかうなだらかに仮名のかく人、手博士と  
 いふともおぼえず。たゞいふにさらば其よし書そへよとあれば、す  
 なはち筆をとりぬ。藤原千浪」(9表)

(附記)

拙稿「井上文雄著述目録稿」(『成蹊國文』四十八号、平成二十七年  
 三月)に於て、『美與之野帖』を藤堂高猷の「家集」と記したが、正し  
 くは高猷書の「法帖」、分類は「書道」である。此処に訂正する。

中澤伸弘先生御所蔵にかゝる加藤千浪自筆『荻園文詞』には、『美與  
 之野帖』跋文が、「伊賀中将の君の書たまふ仮名文のおくかき」と題し

て取められてをり、「誰にきととへば」の箇所が「誰にかととへば」と  
 記されてある由、「誰にき」とは板木師の誤刻ではないかとの御教示を  
 頂いた。記して感謝申し上げる次第である。中澤伸弘「加藤千浪『荻  
 園文集』から」(『日本古書通信』七十二巻七号、平成十九年七月)参  
 照。

(すずき・りょう 東京都立足立工業高等学校教諭、本学非常勤講師)

